土岐市教育研究所
ＴＥＬ　0572-54-1111（内373）
ＦＡＸ　0572-55-6310
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　kyoiku@city.toki.lg.jp
所報　Ｎｏ.５５９
発行責任者　所長　塚本　修
発行日　令和３年９月１０日
題字　山田恭正　教育長

『ぼくの守り神』

撮影　濃南小学校　坂田　まさみ　先生

明るさ

土岐市教育研究所長　塚　本　　修

近年、学校は「ブラック企業」と呼ばれています。子どもが下校してからゆっくり仕事をしようとしても、管理職には「早く帰れ…」と言われるし、いつどうやって仕事をすればいいのか…という声も聞こえてきそうです。学校規模によっては、１人の方に多くの分掌をお任せすることになってしまい、大変申し訳ない気持ちでいっぱいです。夏休みが明けた毎日の激務で、疲れていませんか？怒りっぽくないですか？子どもの前で常に笑顔でいられますか？

私は教師にとって不可欠な能力（あえて能力と言いますが…）は「明るさ」だと考えています。教科指導や子ども理解のための研修はあっても、常に明るい人間でいるための研修はなかなかないものです。だからこそ、自分でその能力を育成しなければいけません。どんなに工夫して教材を提示しても、どんなに筋道立ててわかりやすく子どもに説明をしても、子どもの心が沈み込んでいたり、閉ざされていたりすれば、学習どころではありません。教師は何よりもまず、明るく元気で、子どもの心を活性化する存在でなければならないと思っています。

明るい人のそばにいると、元気や勇気がもらえます。「明るい」とは、冗談を言うことがうまいことではなく、どんな状況になっても、下を向かないで前を向いているということです。だから、よくしゃべる人でも「暗い人」がいます。あまり口数は多くないけど「明るい人」がいます。要は、心のベクトルがどこを向いているかということです。

この「明るさ」という不可欠な能力を育成するためにも、コロナ禍ではありますが、なんとか時間を作って、自分自身が没頭できる活動や趣味の世界を作りましょう。おいしい物を食べる…おいしいお酒を飲む…美術館に行く…ゴルフ場に行く…ジョギングで汗を流す…といった機会を確保しましょう。学校の中だけが自分の世界であったり、教育界だけが自分の世界になったりするような意識や生活から、自分自身を解放する努力をしましょう。

すなわち、自分自身のストレス管理も含めて、心のリフレッシュをしていただきたいのです。そして、毎晩ぐっすりと十分な睡眠をとって、心のベクトルを上向きにしていただきたいのです。人が人を教育するのですから、明るく元気でなくては、心と心の触れ合いは実現しないと私は思っています。

「今、どうしてる？」

土岐市退職校長会　会長 後　藤　東　一

退職をして１７年になり、学校教育の在り方が変わったように感じています。それをどう思う・・と問われても意見を述べるだけの知見は持ち合わせていないのが正直なところです。そこで、これまで私が教育に携わった中で出会った事例の所見を紹介します。

「あの先生は今、どうしてる？」

放課後教室でのことです。低学年の子が国語の宿題で新出漢字を書き出してふりがなを書いていました。ふりがなを漢字の左側に書いていたので「ふりがなは右に書くんだよ。」と助言すると「先生は左に書いていたんだもん。」という返事が返ってきました。国語の教科書を見れば左側にふりがなが書いてないことはすぐ分かります。私はおかしいと思いましたが、それ以上は助言しませんでした。それは、その子の担任に対する信頼を損ねてしまうと考えたからです。また、教育は意図的計画的な営みであるので、先生が子どもの前で左にふりがなを書いたのにはきっと意図があったはずです。この先生は、左にふりがなを書いた理由をどこかの場面で子どもに説明をしてくれていると今でも信じています。

これも新出漢字の指導の事例です。中学校の２年生の国語の授業で生徒が先生の机の前で列になっていました。並んでいる生徒に聞くと先生は、一人一人の新出漢字が正しく書けているか点検しているとのことでした。一人の生徒が点検を受けるのは数分です。列をなしている生徒は、ただ順番を待っているだけです。授業後にこの先生の意図を尋ねると、生徒の漢字の書き方の乱れが気になっているので新出漢字の「とめ」「はらい」「はね」がしっかりできているか自分の目で確かめたかったとのことでした。国語教師として漢字の乱れは見過ごすわけにはいかなかったのでしょう。私はこうした漢字に対するこだわりを認めつつ、生徒の持つ力を信頼して生徒同士で点検し合う方法もあることを伝えました。授業は５０分で完結です。この先生は今、どう漢字の「とめ」「はらい」「はね」を定着させているでしょうか。

「あの子は今、どうしてる？」

土岐市文芸祭俳句部門小・中学生の部の審査員をしていたときのことです。小学生の応募作品の中に「ふるさとやどちらを見ても山笑う」という句がありました。正岡子規の句に「故郷やどちらを見ても山笑ふ」という句があります。４年生の国語の教科書に載っていました。表記こそ違え、明らかにそのままで応募したのです。当然、選外です。でも、この出来事は、応募した子にとってはどうだったでしょうか。おそらく学校の夏休みの課題として出され、俳句ができなくて悩んだ末、この句を担任に提出したのでしょう。受け取った担任が、あるいは担当教員が子規の句だと知っていればきっと何らかの指導があり、文芸祭に応募されなかっただろうと思っています。子規の句を自分の応募作品としてしまった本人にとって、この事実はどんな形で心に残っているでしょうか。心の傷になっていなければいいのですが・・・。

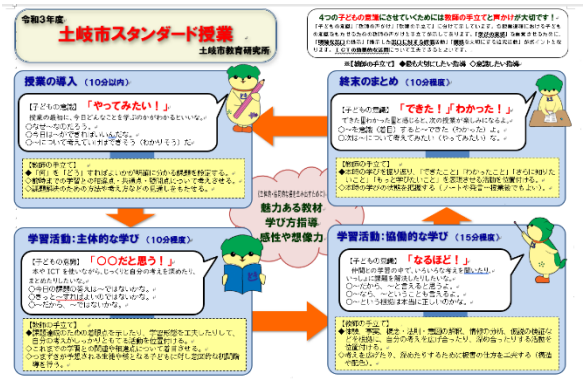
次は、学年主任から聞いた話です。受験が近づいた頃、掃除の時間に校舎と校舎の間にある渡り板にいつも懸命に雑巾がけをしている生徒が気になっていたそうです。そこで、「寒く冷たいのにどうして手を抜かないで雑巾がけをするのか？」と尋ねると、多少ニュアンスは違っているかもしれませんが、その生徒は「受験のことが気になって不安で仕方がない。今、自分がしなくてはならないこの雑巾がけをやらないで済ますと他のことまでいい加減になってしまうような気がする。」と答えたそうです。この生徒の姿を見逃さず、こう語らせた学年主任はさすがです。受験への不安を吐露したこの生徒は、もう３０歳台半ばです。生きていく上で新たな不安はいくらでも出てきます。この生徒はおとなになった今、新たな不安にどう立ち向かって生きているでしょうか。

コロナ禍が続き、子ども同士や子どもと教師の関わり方に気を遣わなくてなりません。でも、学校教育は意図的計画的な営みであることに変わりはありません。どうぞ先生方、子どものためにご活躍ください。

各小中学校の学力向上推進　～学校訪問を通して～

学力向上推進リーダー　松 原 敦 也（下石小学校 教頭）
教育研究所　主　任　　加 藤　　望

今年度は、学力向上推進委員会として市内各学校の教育長訪問に同行しています。各校の先生方の授業参観や、教務主任さん・研究主任さんとの懇談を通して、各校の指導法の成果を学んでいます。本稿ではその成果を市全体で共有するために、学力向上推進委員会で大切にしている土岐市スタンダード授業の重点と関わらせて、各校の取組を紹介します。



土岐市スタンダード授業
令和３年度の重点　は、

① 広がり・深まりのある終末の姿の具体化

②「何を」「どう」すればよいか　が明確にわかる課題設定

です

【泉小学校 （5/24）】

泉小学校では「主体性の育成と伸長」を教育指導の重点とし、子どもたちが、願いをもって「できた、分かった」と実感できる授業づくりを目指しています。

本年度は、子どもの「〇〇したい」という思いを喚起する授業改善に特に力を入れ、その推進のポイントは次の３点でした。

①　意欲の喚起
②　ＩＣＴの積極活用
③　職員研修

授業では、導入場面での工夫や構造的な板書、考える時間の確保の他、できたことや分かったことを確かめ合う交流の時間を大切にしてみえました。

参観した授業では、どの先生も子どもたちに対して、「本時何ができればよいか」を明確に示したり、コロナ禍で制限のある中であっても知恵をしぼって学習活動を工夫したりして、授業改善に向けて挑戦的に推し進めてみえました。

研究主任さんとの懇談では、「昨年度、市の指定で報告いただいたプログラミング教育については、今年度も引き続き取り組み、実践をアップグレードさせていきたい。」と話がありました。発表会が終わっても研究推進の歩みを止めない…挑戦し続けていく泉小学校のすばらしさを感じました。（加藤）

【西陵中学校 （6/21）】

運動場から聞こえてくる元気な号令、黙々とポスターを描く姿、仲間と教え合いながら式の値を求める姿、子どもたちの姿から授業に向かう迫力を感じました。

研究主任さんにその要因を尋ねると、「『生徒同士の活動から学びを』を合い言葉に職員全員で共通理解して取り組んでいる。」

とのこと。なるほど、生徒を主役にして授業を展開することがこの迫力につながっているのだと納得しました。

西陵中学校の先生方の実践から、

① 交流の目的を明らかにし、交流の視点、追究の手立てを子どもにしっかりともたせた上で交流を行うこと
② 共通理解したことを全員が実行に移している職員集団のチームワーク

を学ばせていただきました。また、参観した全ての授業でＩＣＴ機器を活用した授業が行われていました。

さらに、西陵中学校では毎週火曜日の放課後に、各学年で自主的に道徳の教材研究を行っているそうです。

ベテランの先生から若い先生へと授業づくりの継承が自然となされていくということが難しくなってきた今日の学校現場です。チームワークのよさから、たくさんの刺激を受けました。（松原）

【濃南小中学校 （6/25）】

指導案集を見て印象的だったのが、土岐市スタンダード授業の重点がよく反映されているということでした。特に、ねらいには「（活動・方途）を通して、（新たな考え方・知識・技能）に気付き・分かり、（付けたい力）することができる」と、統一性がありました。

ねらい（出口の姿）が不明瞭だと、指導の手立てがブレてしまいがちです。濃南小中学校では、どの授業においても、出口に向かって的確に手立てが打たれていました。小学校の研究主任さんが、学力向上推進委員会の会議を受けて、独自に学力向上を推進していくための資料を作成して、学校内に力点を広めて、指導の統一性をつくっていると感じました。

また、「小中一貫型小学校・中学校」の特徴を活かして、小・中相互乗り入れによる教科担任制が導入されていました。

その成果を中学校の研究主任さんに尋ねると、

① ９カ年の系統性を意識した指導が可能
② 教師の専門性の活用

この２点が大きなメリットと話されました。

現在、教科担任制がより効果的なものとなるように、９カ年を見通したカリキュラムの作成が進んでいます。

これは小中一貫型だからこそできることかもしれませんが、オンライン等によるつながりが可能となった今、小学校の母体を崩さずに中学へ進学していく土岐市には、そのよさを活かす素地が、どの学校にもあるのではないかと感じます。（松原）

【妻木小学校 （7/1）】

妻木小学校の研究主題は「主体的に学び合い、確かな学力を身に付ける児童の育成」です。参観を終え、まさにその研究主題に向かう授業が行われていると感じました。

６年生社会科の授業では、聖武天皇が仏教の力で国を治めようとしていたことを、子どもたちの学び合いによって導き出していました。全体交流の場で教師は、話し合いのコーディネーター役に徹していました。導入の段階で「何について考えればよいか」「どのように追究すればよいか」を理解させていることが、子どもたちの主体的な学びにつながっていました。

研究主任さんからは、全てのことについてスモールステップで手立てを用意する授業は、ともすると、児童を受け身にさせてしまうことがあるので、次の２点を重視していると話がありました。

①　どの部分を教師が教えどの部分を児童に考えさせるかを整理して明らかにすること
②　じっくりと考える場面をつくり出すこと

妻木小学校では、目指す子どもの姿を共有したうえで、どの学級でも朝の時間を使った全校一斉の学習指導を行ったり、ステップ表を使って話し方指導を行ったりしています。日々の授業実践の積み上げとこの指導の成果が、生き生きと主体的に取り組む子どもの姿になっていると感じました。（松原）

【土岐津小学校 （7/2）】

学校共通の重点がすべての指導案に位置付いており、校内の統一感がありました。研究推進委員の中で練ったポイントをもとに、各学年部で重点を共有しながら指導案を作成しているとのことです。

どの先生も終末の子どもの姿を明確に示すことができており、このことが低学年から高学年までの全ての学級が落ち着いて授業に参加できる姿につながっていると感じました。

また、学校全体で積極的に iPad の活用に挑んでいました。月２回の校内ＩＣＴ研修の実施の成果を見ることができました。

研究主任さんからは、

①　まずは授業の構成をつくり上げる。
②　そのうえで、効果的に iPad を活用することを考えていく。

という手順を大切にしたいと説明がありました。

実際に４年生の算数科の授業では、ロイロノートを使って、子どもが主体となって学ぶ活動を参観しました。

土岐津小学校では、「とにかく使ってみよう！授業が変わるはず！」というワクワク感がある合言葉をもとに、タブレット活用が進んでいました。（加藤）

【肥田中学校 （7/12）】

発言者を向いて話を聞く姿、根拠を明らかにして自分の考えを述べる姿、周りと違っても自分の考えを堂々と語る姿、仲間の発言からつながっていく挙手発言・・・授業を参観させていただいて、肥田中学校の生徒の素晴らしい姿に感心しました。

研究主任さんにその要因を尋ねると、次の２点が返ってきました。

① 職員集団のチームワークのよさ
「肥田中学校では、授業に関わる分からないところがあると気軽に聞いたり、意見交流を行って確認したりする雰囲気がある。また、学習支援員の先生方が常に教科書を持って『子どもに力を付けてあげたい』という思いで支援にまわってくださっている。」

② 研推と学習部の連携による共通理解の徹底
「肥田中学校では、学力向上のための手立てを研推と学習部が連携して検討し、全職員で実践している。また、その手立てをＰＤＣＡサイクルにより検証していくことでさらなる重点の徹底を図っている。」

子どもの姿と先生との話から、肥田中学校の先生方の情熱や確かな取組の積み重ねが、今の子どもの姿につながっているのだと実感しました。（松原）

【下石小学校 （7/13）】

授業参観でとても驚いたことは、小学校１年生から６年生までのすべての子どもたちが、ハンドサインを使いこなして授業に参加していたことです。

校区の研究主題は「みんなができる みんなでできるようにする 西陵中学校区の授業づくり」です。ハンドサインで意思表示をし、交流場面で自己表出をすることは、子ども参加型の授業の大切なポイントとなっていました。

学力向上に向けた授業改善の手立ての１つとして、「みんな」をキーワードに学校全体で統一感のある取組がありました。

教務主任さんや研究主任さんは、「下石小の先生方は、新しい提案に対してどんどんチャレンジして下さいます。ＩＣＴ教育についても職員室で先生同士が積極的に教え合っています。」と話されました。

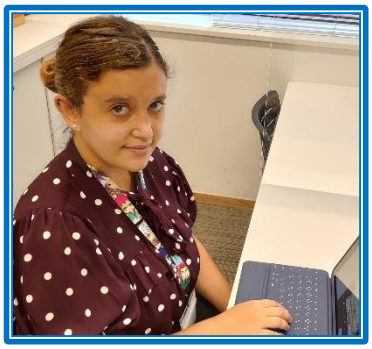
下石小学校の訪問を通して、

① 校内の先生方が目的や方法を共有し、共通理解・共通指導をしていくことが、実効性のある指導支援につながる。
② ＮＲＴの経年の結果を分析することで、学力向上について検証していく。

ことを強く感じました。

数値をもとに厳しく評価しようと「挑戦」する姿勢、職員集団が「統一感」をもって授業改善にあたる姿勢を学ばせていただきました。（加藤）

新しいＡＬＴ着任「アメリカ文化を教えたい！」



ファントウィクズ・アセナ・メガンさん

- 米アリゾナ州出身
- 西陵中校区、駄知中校区の幼稚園・こども園・小学校・中学校担当
- カリフォルニア州立大モントレーベイ校で日本語や日本文学を専攻
- 留学時に習った茶道が趣味、美濃焼の陶芸体験に興味あり

Hello! My name is Athena Funtowicz.　I am from Phoenix, Arizona, USA.　I studied Japanese language and culture in college.　I like Japanese tea and pottery.

【サマーセミナー、ありがとうございました】

昨年度は開催できなかったサマーセミナーを、今年度は感染症拡大対策を行いながら、講師の方や会場校の先生方のご理解とご協力の中、無事に終了することができました。ありがとうございました。

希望制ながら１２４名の方が参加され、先生方の研修意欲の高さを感じました。受講アンケートからも、講座内容に９８％の方が満足、概ね満足と回答いただき、参加者のニーズに応えることができていたのではないかと考えます。特に、タブレットの活用に関しては、学校現場の喫緊の課題でしょうか、夏休み中に復習して休み後は授業で是非活用していきたい、という感想が多数ありました。サマーセミナーの成果が園・学校現場で生かされることを願います。

【ロイロノート初級】

【ロイロノート中級】

【救急救命】

【特別支援教育】

◆土岐市中学校体育大会　団体結果◆

種目		優勝	準優勝	第３位
陸上	男子総合	駄知中学校	土岐津中学校	西陵中学校
	女子総合	泉中学校	西陵中学校	土岐津中学校
	男女総合	泉中学校	土岐津中学校	駄知中学校
バレーボール	男子	泉中学校	土岐津中学校	
	女子	土岐津中学校	西陵中学校	駄知中・泉中
バスケットボール	男子	泉中学校	西陵中学校	土岐津中学校
	女子	泉中学校	西陵・駄知中学校	
ソフトテニス	男子	西陵中学校	駄知中学校	土岐津中学校
	女子	肥田中学校	西陵中学校	駄知中学校
卓球	男子	西陵中学校	駄知中学校	土岐津中学校
	女子	泉中学校	土岐津中学校	濃南中学校
剣道	男子	西陵中学校	泉中学校	土岐津中学校
	女子	土岐津中学校	西陵中学校	

※コロナ禍の中、感染症と熱中症対策を講じて開催されました。

「心にひびく言葉」

「ハジメチョロチョロ　ナカパッパ」

土岐津中学校　　教頭　河地　貴司

昨年度よりコロナの感染拡大のため野外での飯盒炊飯の体験活動の実施が難しくなっていて残念な思いです。さて、かまどでご飯をうまくおいしく炊くための言葉として

ハジメチョロチョロ　ナカパッパ
赤子泣いても蓋とるな
じわじわときに　火を引いて
10 分たったら　出来上がり

というリズムのある七五調の言葉があります。今ではご飯を炊飯器で炊く家庭がほとんどですので知らない人も多いと思います。私自身もキャンプなどの飯盒炊飯のときぐらいしか、考えたことはありませんでした。

ところが、ある先生は「この言葉は、ご飯を炊く火加減のことだけでだけでなく、日常生活や教育活動にも当てはまる」とおっしゃいました。

「はて？」と思いましたが、

○「ハジメチョロチョロ」何か事を始める場合は、事前に十分考慮し（思考は行動のリハーサル）準備運動をし、フライングに注意する。

○「ナカパッパ」いったん始めたら全力投球し、手抜きをしないで最後まで精進・努力する。

○「赤子泣いても蓋とるな」困難にぶつかっても、じっと耐え三日三晩考え、先輩に相談し、より一層の努力をして困難を克服する。

○「じわじわときに　火を引いて」物事には引き際がある、潮時から深追いは怪我の元だから調子に乗ってはいけない。

○「10 分たったら　出来上がり」勝って兜の緒を締める、最後まで気を緩めずに安心するな。

なるほど「計画・実行・対策・見届け」のサイクルです。ＰＤＣＡサイクルと合わせて大切にしています。

掲　示　板

【土岐市児童生徒科学作品展　金賞受賞者】

みやけ　りな（肥田小１年）　いのう　こうせい（肥田小１年）　大はし　晴人（妻木小２年）
井戸　菜津歩（駄知小２年）　小山　悠琉希（土岐津小３年）　井上　耕助（泉小３年）
加藤　るい（下石小４年）　後藤　紘誠（駄知小４年）　井本　紗智（肥田小４年）
加藤　遙真（土岐津小５年）　小山　凛咲希（土岐津小５年）　水野　凌誠（下石小５年）
山野　藤子（土岐津小６年）　宮地　利奈（土岐津小６年）　依田　悠花（下石小６年）
岩本　汰朗（土岐津中２年）　中根　昇太朗（駄知中２年）　林　かえで（西陵中３年）
水野　真凪歩（西陵中３年）　小栗　千佳（駄知中３年）

【土岐市社会科課題追究学習作品展】

［最優秀賞］高橋　咲（泉西小３年）［優秀賞］土川　友佳（土岐津小４年）、足立　さら（泉小４年）

【土岐市読書感想文コンクール　金賞受賞者】

あんどう　きいな（泉西小１年）　にっとう　きら（駄知小２年）　かえで　あむ（肥田小２年）
あんどう　はな（泉小２年）　水野　えい太（妻木小３年）　平手　宏典（下石小４年）
渡邉　さなみ（泉小４年）　熊谷　紬（泉西小４年）　笹岡　優楽（泉小５年）
村上　夏菜（濃南小６年）　酒井　偉生（駄知小６年）　塚本　彩歩（泉小６年）
高椿　浬（泉中２年）　後藤　舞子（土岐津中３年）　安藤　かな美（駄知中３年）
宮川　昂子（肥田中３年）

編集後記

本号では、大先輩の先生が執筆してくださいました。(P.2) 一人１台のタブレットの導入によって、授業の様相が大きく変わってきています。ICT 端末による授業スタイルの変化が「流行」ならば、教師として、目の前にいる子どもに目を向け、心に寄り添いながら子どもと共に歩むことは「不易」のこと。改めて感じます。